

大阪の部落史通信 1

発行 大阪の部落史委員会

〒556 大阪市浪速区久保吉1-6-12 TEL 06-568-3072 FAX 06-568-0714

主な記事

- 大阪の部落史委員会、発足 (1)
 大阪の部落史編纂事業に寄せて (3)
 史料紹介～「河州西郡村穢多共乱妨 打毀一件」 (6)
 各地区の部落史研究～貝塚 (7)
 図書紹介～『被差別部落の民俗伝承』 (8)

大阪の部落史委員会、発足

イデオロギーをこえた

実証的研究を



上田正昭 (大阪の部落史委員会委員長・大阪女子大学学長)

大阪府・大阪市をはじめ関係各位の御理解、御協力のもとに、一九九五年度から一〇カ年の長期的展望と編纂体制をととのえ、本格的な大阪の部落史を編纂することになりました。

本委員会の発足に先立ちまして、大阪の部落史編纂委員会がスタートしましたのは、一九九二年の七月でした。そして、部落解放同盟大阪府連合会、大阪府同和事業促進協議会、大阪市同和事業促進協議会、部落解放研究所、大阪人権歴史資料館ならびに部落史の研究者によって構成さ

れました。この委員会が組織されたのは、ここ二〇年ばかりの間に、各地域の部落史をめぐる調査と研究が着実に積み重ねられてまいりましたが、大阪においては大阪府全域を視野に入れた部落史のあらたな究明はなお十分であつたからです。

一九九二年の七月に結成された大阪の部落史編纂委員会は、二つの目的を設定しました。その第一は、大阪の部落史に関する研究の成果と課題を明らかにするために研究会を組織すること、その第二は、部落史にかかわる基礎的な史料を収集かつ整理することでした。

第一については、ほぼ毎月、研究会が開催され、大阪の部落史の史実の評価ならびに研究の視角と方法についての活発な討論が展開されてきました。そして、最終的には『新修大阪の部落史』上・下として刊行しました。

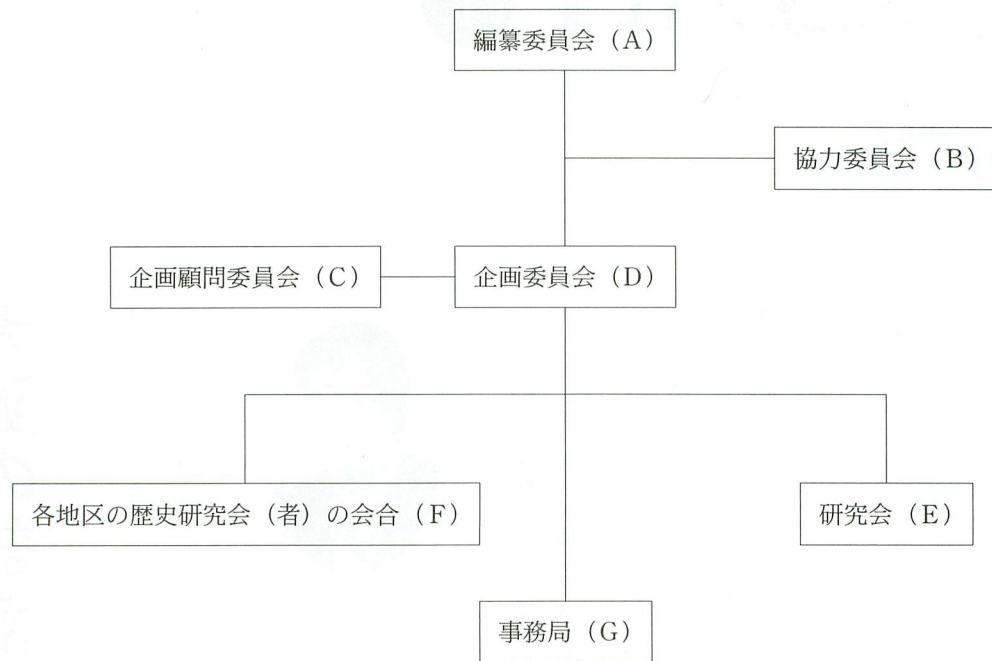
第二については、①大阪府下の「市町村史」の部落問題関係の目録、②『救済研究』・『社会事業研究』の部落問題関係の目録、③「時事新報」・

「大阪時事新報」・「大阪朝日」・「大阪毎日」ならびに戦後大阪の部落問題関係新聞記事の目録、④大阪府・市会の「議事録」の部落問題関係の目録、などをまとめました。

これらの仕事は、この編纂委員会の委員長として尽力されました小林茂先生をはじめとする関係各位の努力によって進捗したところですが、一九九三年の八月二日、事業なかばにして惜しくも小林先生は逝去されました。そのあとをうけて、微力ながら私が本編纂委員会の委員長に選出され、その計画の具体化を継承することになりました。

あらたな研究成果の構築は、綿密な史料の収集と整理、そしてその科学的な分析なくして達成しうるはずはありません。またすぐれた問題意識の共有と新しい研究分野の開拓なしには、充分な実りをもたらさうるはずもありません。そこで私どもは、調査・研究の組織をより整備し、また関係各位の御理解と御協力のもとに、冒頭に述べましたような本格的な大阪の部落史編纂事業に取り組む運びとなりました。その年次計画として、一九九五年度から一九九九年度までを△前期▽、二〇〇〇年度から二〇〇四年度を△後期▽とする長期

大阪の部落史委員会の体制



の調査と研究の目標を設定し、通史編、史料編、年表・補遺・索引を含む全一〇巻の構想の具体化をめざすこととなりました。

基礎的な史料を可能な限り収集して、充実した大阪の部落史を作り上げることが、差別からの人間の解放へ向かつての明日への展望を、イデオロギーをこえて実証的に明らかにしていく仕事になると考えています。今後とも大阪府・大阪市をはじめ関係各位のますますの御理解と御協力をお願いする次第です。

(A) 編集委員会

委員長 上田正昭 (大阪女子大学)
委員 高橋正人 (部落解放同盟大阪府連合会)
松岡 徹 (同前)
寺本 知 (大阪府同和事業促進協議会)
大賀正行 (同前)
吉田信太郎 (大阪府同和事業促進協議会)

協議会

中本順一 (同前)
村越末男 (部落解放研究所)
友永健三 (同前)
向井 正 (大阪人権歴史資料館)
秋定嘉和 (池坊短期大学)
寺本 伸明 (桃山学院大学)

(B) 協力委員会

・ オブザーバー 大阪府、大阪市、市長会、町村長会
・ 部落解放同盟各支部
・ 同和事業促進各地区協議会

(C) 企画顧問委員会

委員長 上田正昭

宮田 登 (神奈川大学)

〈中世〉

山路興造 (京都市歴史資料館)

〈近世〉

牧 英正 (奈良産業大学)

〈近代〉

辛 基秀 (青丘文化ホール)

小山仁示 (関西大学)

(D) 企画委員会

委員長 上田正昭 (大阪女子大学)

〈古代〉

井上満郎 (京都産業大学)

〈中世〉

布引敏雄 (大阪明浄女子短期大学)

〈近世〉

寺本伸明 (桃山学院大学)

中尾健次 (大阪教育大学)

〈近代〉

秋定嘉和 (池坊短期大学)

北崎豊二 (大阪経済大学)

〈戦後〉

渡辺俊雄 (部落解放研究所)

大阪の部落史編纂事業に寄せて

可能な限りバックアップ

濱本啓義（大阪府同和対策室次長）

大阪の部落史編纂事業は、府下及び全国に散逸した貴重な文献等を収集・整理し、部落差別の歴史、これに対する先達の様々な取組みなどを集大成するとともに科学的に研究・分析を行うことを通じ、府市民に同和問題についての正しい理解を深め、同和問題の根本的解決にアプローチしようとするものであり、本府としても、極めて有意義かつ時宜を得た事業であると考えています。

大阪の部落史編纂委員会においては、従前より、編纂のための準備を着々と進められ、今年度より一〇年計画で本格的な事業着手に踏み出されたことに対し、深く敬意を表するところです。

本府においては、編纂委員会の事務局を担当される部落解放研究所の御協力を得ながら、大阪市と共に、この大事業が計画どおり推進される

よう可能な限りバックアップする所存です。

どうか、今後、この編纂事業が計画どおり順調に進み、これから生み出される貴重な成果が、同和問題の早期解決を図る上で、行政及び府民各層の取組みにおいて十二分に活用されることを心より祈念して、簡単ながら御挨拶といたします。

『大阪市史』を

補完する事業として

室 力松（大阪市民生局理事）

大阪の部落史編纂委員会は、一九九二年七月、部落解放同盟大阪府連合会、大阪府同和事業促進協議会、大阪市内同和事業促進協議会、部落解放研究所、さらには、多くの研究者のご参加を得て発足いたしました。発足にあたり関係者の非常なご努力があったと聞き及んでおります。そのご努力に改めて敬意を表する次第であります。

これまで大阪市内においても、各地域の部落史の掘りおこしがなされ

てきました。しかしながら、残念なことに大阪府全体を視野に入れた部落史がまとまっていない状況にあります。

本市としましては、本編纂事業を大阪市史を補完する事業として受けとめているところでございます。

一九九五年度から一〇年にわたり関係者のご努力により、本格的な史料収集と史料集・通史の編纂で大阪の部落史編纂事業が成功裡に終わら

れますことを祈念し、ごあいさついたします。

「啓発の時代」に

ふさわしい歴史研究を

秋定嘉和（池坊短期大学）

解放運動は御承知のように「啓発の時代」にさしかかっています。啓発にはやはり科学的な基礎が必要です。つまり、部落差別や特に伝統的な差別意識への啓発ということになります。やはり歴史研究が大きな役割をになっていることはいうまでもありません。

大阪の部落史編纂さん

10年計画で
解放研究などが
通史、史料編の全10巻

部落解放研究所（大阪市）が中心になって、十年計画で大阪の部落史を編纂する事業が二十八日、始まった。A5判、五百頁の通史や史料編全十巻を刊行する構想だ。

上田正昭大阪女子大学長を委員長に「大阪の部落史委員会」を組織。この日は、部落解放同盟の支部などでつくる協力委員会の初会合が開かれ、上田学長が「貴重な史料を持っている人の理解や協力がなければ十分な部落史が編さんできない。差別からの解放、人間の解放に向かって明日への展望を開いていくためにも、基礎的な史料を収容した部落史にしたい」とあいさつした。

初年度は府、大阪市からの計八百万円の予算で古文書の調査などを行う。

読売新聞 1995年4月29日

部落史の教育的成果をめざした編集事業としては、先駆的な形ではすでに兵庫県で一九六八・七四年にかけて取組まれ『兵庫県同和教育関係史料集』(全三巻)が刊行され、一方、

部落史の分野においても京都府で一九七七年から編集事業に取組み『京都の部落史』(全一〇巻、第一巻未刊)が、刊行されました。奈良県でもまた、一九七〇年には『奈良県同和教育史』が、一九八三年から取組まれた『奈良県被差別部落史』(全六巻)が、奈良市でも一九八三年には『奈良の部落史』が刊行されてきました。

ところが大阪の府・市レベルの編集事業は余り進んでいなかったもので、私にはそれが奇異に思えました。というのも御承知のように近代以前、大阪は、特に西浜を中心とした皮革産業の最大の町だったわけですから。近代に入りまして、戦前まではその地位を占めていました。一般の商工業でも東京と対抗するレベルにありました。部落産業を担った部落のブルジョワジーたちは、融和運動の基礎になりましたし、水平運動の基礎にもなりました。したがって、大阪は戦前、そしてさらには戦後にかけても全国的な部落解放運動の大きな基盤でなかったかと私は

思っています。にもかかわらず、歴史の編纂は兵庫、京都、奈良、四番組が大阪と大変遅れていたからです。

いずれにしても、戦前、戦後の解放運動の拠点地でこういう部落史の編集事業が一〇年計画で行われることは大きな歴史的意味を持っています。これまで取組まれてきた編集事業の成果をふまえた意義あるものにしていくたく存じますので、関係各位の御協力をよろしくお願いいたします。

地元の協力・参加をえた

部落史研究を

大賀正行 (大阪府同和教育事業)

促進協議会)

従来の同和教育事業はハード面といえますが、劣悪な部落の環境をどう変えていくのかということが中心的に進められてきました。そして、かなり成果も上がってきたという中で、物の面から心の面、即ち人権啓発へ移ってきています。しかし日本の政治や経済もそうですが、依然としてハード面第一主義があり、予算にはつきり現れています。例えば、ハード面の土木建築関係の予算なら億

単位でつきますが、今回の大阪の部落史の編集事業の予算八〇〇万円を確保するのに苦労したように、精神的な面となるとなかなか予算がつきにくいといえます。特に大阪は「商人の町」ということもあり、京都、奈良に比べて文化面で遅れがあり、部落史の編纂が遅れているのもその一つの表れかもしれません。

いずれにしても本年より、部落史の編集事業がスタートしましたが、早くやらないと史料も消えていきますし、思い出や記憶を持つていける方も亡くなっていくわけで、本当は遅いな、という感じがするぐらい



です。そして部落史の編纂を通して、反差別・人権の歴史や伝統を後世に受け継いでいくことが大切です。このことは部落民や解放運動関係者だけでなく、すべての府民にとっても大事なことです。その意義が今日ようやく理解されてきたと思います。これも一つの時代の変化の表れだと思っています。

今までも個々の部落で部落史を発掘し、その報告書が出ていますが、大阪全体を視野には入れていませんでした。それを今回、本格的にやっています。そういうわけです。そして従来、部落史研究はややもすれば、学者・研究者の方々中心の領域だったわけですが、地元の人たちの協力・参加も得て共にやっていくということで、部落史委員会の中に協力委員会もできたと思います。ただ、地元ではまだまだ「歴史や文化」より「家や環境改善」の方が熱心だと思えます。ですから、今後とも地元の人たちの理解と参加を得ていくことも大事な取組みだと思います。

一〇年という息の長い取組みが今日からスタートするわけですが、上田正昭先生を先頭に関係者が協力し合ってぜひともこの事業が成功するよう邁進していきましょう。

運動の前進のためにも

明確な歴史の総括を

高橋正人（部落解放同盟大阪府連）

一〇カ年計画という長い気がしますが、完成されるのは二〇〇四年で、二一世紀に入っており、社会全体や解放運動そして解放同盟がどのような姿になっているのか、ということも念頭において、一〇年で完成できるようにがんばっていききたいと思っています。

運動の場合は差別撤廃をめざし前を向いて進むということで、あまり過去のことは考えていない面があります。しかし、これからの複雑な情勢の中で質的に前進していくためには、これまでの歴史や運動というものを明確に総括しておくことは重要です。ぜひ大阪の部落史編纂事業は立派なものにやっていきたいと思っています。そういう意味で、条件が熟してきたのではないかと思います。

部落史そのものに関しては、私どもはどういうことが「通説」なのかは十分熟知していませんが、「通説」にこだわらずに現実の史料に即した歴史を明らかにしてもらえたらと思

っています。そういう意味では、解放運動にとつても、新たな部落史の解明が進められることによって刺激になりますし、さらに解放運動だけではなしに大阪の民衆史というようなことも視野に入れてやって欲しいと思っています。

その点でも、今回の編纂事業は画期的なことで、大阪府連としても最大限の努力をしていきたいと考えています。

新しい歴史の

掘り起こしを共に

今井健嗣（大阪人権歴史資料館）

大阪の部落史編纂事業の最終目的は、史料の編纂・刊行と思います。

私もリバイティおおさかは資料の展示・公開となります。ですから最終目標は違いますが、部落史の史料を調査・収集し、新しい歴史を掘り起こしていく作業という点では全く同じ作業をしていく、そういう意味では志しを同じくしていると思っています。私どもの持てる力を編纂事業に提供させて頂きたいと思っています。

リバイティおおさかは本年一二月五日、新装して展示事業を展開してい

く予定をしています。その折は展示の方は是非とも御覧いただきたく存じますが、同時に史料の保管という

ことでは一級の設備を整備していつていきますので、その面では積極的に御協力していきたく思います。



近刊紹介

「大阪の部落史」
編纂委員会編

「新修 大阪の部落史」上
A5版四三六頁
定価五五〇〇円（税別）

もくじ

「大阪の部落史」研究の成果と課題

〈古代・中世〉

古代の被差別民

上田 正昭

中世の被差別民

森 明彦

〈近世〉

近世かわた村の概況

中尾 健次

近世部落の成立過程の具体相

寺木 伸明

かわた役負担論の射程

のびしょうじ

かわた生業構造の特質

のびしょうじ

近世かわた村の生活―「家観念」を中心に

中尾 健次

身分解放の闘い

藤原 有和

部落寺院と真宗教団

左右田昌幸

摂津・河内・和泉の「非人」

小西愛之助

多様な「情念的」賤民―聖・夙・陰陽師を中心に

森田 康夫

史料紹介

「河州西郡村穢多共乱妨打毀一件」

布引 敏雄（大阪明浄女子短期大学）

不正に対する訴訟

ペリーの黒船来航より八年前の弘化二年（一八四五）、河内国若江郡西郡村では、被差別部落の内部で打ち毀し事件がおきた。

西郡村（現在は八尾市に属す）は総高一八四九石余の村だが、本村より二丁ほど隔てて枝郷の字東歩があった。字東歩は高二四六石余で一五三軒の被差別部落民が居住する村である。字名については、写本では歩とも寄とも読め、東歩か東寄か判然としないが、ここでは一応「東歩」としておく。

さて、この打ち毀し事件の発端は、年貢の納入をめぐるいざこざにある。弘化二年四月、東歩の人々のうち一六人は、本村の庄屋や年寄らの年貢納入に関わる取扱いに不正があるのではと疑念を抱き、江州大津の陣屋に訴え出た。当時の領主は『中河内郡誌』によれば松平右京太夫、角川書店『大阪府地名大辞典』では

単に幕領と記されていて、今のところこれ以上のことはわからない。

ところが、この訴訟は七月三日には「御吟味取下げ」となる。この訴訟に参加しない三七人がいたことが、この訴訟を貫徹できない理由であった。要するに、内部に裏切り者（本村に味方する者）がいてはダメなのだ。こうしてこの訴訟は失敗に終わるが、それ以後、東歩の内部では対立が激化した。

騒動の推移

この対立の中で小さな喧嘩が相次ぎ、これをきっかけに七月一七日、騒動がおこった。当時、東歩に居あわせた無宿えた由松と亀蔵（二人とも東歩の出生）は、三二人方（訴訟不参加三七人のうち五人は極貧困者なので論外とし、残りの三二人）が本村に味方し勢力を伸ばし、その上、一六人の者に傷を負わせたといい、仕返しをするので一諸に立ち上がれと説いて回った。

由松と亀蔵の呼び掛けに応じて、一六人方のうち七〇人が行動を共にした。由松と亀蔵は割薪を持って群衆の先頭に立ち、三二人方の行事やその他の住居八軒を襲い、入口や戸障子などを打ち毀す乱暴を働いた。

襲われた三二人方の人々は、身の危険を感じて老人や妻子を連れて本村へ逃げこんだ。打ち毀しの群衆はなおも本村を襲う勢いを見せたので、本村の方でも、この騒動に対処するために行動を開始した。それを察知して由松と亀蔵が引き返したので、彼らに従っていた群衆も家に帰り騒動は終息した。

翌七月一八日、支配御役所手代による召捕りが行なわれたが、由松と亀蔵はいずれこへとも知れず逃げうせてしまった。騒動に参加した人々には大津陣屋に入牢、一〇月二二日に出牢を許されている。ただし、元行事の半兵衛のみは首謀者と見なさ

れたためか吟味が継続され、翌弘化三年（一八四六）六月、吟味中に病死している。

騒動の背景

― 部落内の階層分化 ―

この騒動は、一見すると被差別部落内部の対立のように見えるが、実はそうではなく、被差別部落内部の階層間の対立と枝郷・東歩と本村の対立が複雑に錯綜したものだ。

東歩内部の階層間対立は、訴訟にも姿を現している。訴訟参加の一一六人方で、かつ打ち毀しに参加し入牢を命ぜられた喜右衛門らは、ほとんどすべて無高で「小作農業渡世」の人々であり、また打ち毀し不参加の人々も無高で「雪駄」作りや「革細工」の人々であった。

一方、三二人方の人々は僅少ながらも高持ちであり「雪駄」作りや「革細工」を渡世とする人々である。要するに、概して言えば打ち毀し参加勢力は無高層であり、訴訟不参加組は高持ちである。

年貢は米納で、東歩の人々は「往古より最寄村方作徳米之内買替納来候」つまり近隣の村々より購入して納めていたらしい。それだけに無高の人々にとってはシンドイ課説だっ

た。年貢納入をめぐる訴訟に無高層が結集し、高持ちが不参加（本村方に味方）という構図は、そのまま打ち毀しに連なっている。

騒動の背景

― 本村の枝郷支配 ―

この階層間の対立に、重複したのが本村による枝郷支配の矛盾である。被差別部落に対する差別は、江戸時代後期には武士支配の維持のために増強に強化され、枝郷支配にも強く影を落としていただろう。枝郷の東歩には「えた行役」がおかれたが、その任免は本村役人の専決が領主の承認を要するものかについて、この一件では対立の論点となっていた。いずれにしろ、本村による枝郷支配が東歩住民の意思を無視することが多々あったらしい。

そうした中で、本村の庄屋・年寄らによる年貢取扱いに疑念が生じたのだ。しかも、被差別部落内部の上層が本村方に味方する行為に出た。前記のように無高の者らは「小作農業渡世」であったが、その地主は本村百姓であったと推測され、この地主―小作関係の対立が、本村年寄らによる年貢徴収の不正疑惑に重なったものと思われる。

この騒動は被差別部落民の枝郷支配に対する抵抗であり、すなわち、差別の元凶である封建社会の基盤を突き崩す行為であったとみなすことができる。この騒動は被差別部落住民の敗北という形で決着するが、時代を進める大きなうねりの中の一歩であった。

各地区の部落史研究

東の歴史と生活を 掘り起こす会

◆むらとむすびついた教材で教えたい
― 歴史と生活を掘り起こす会 ―の始まり

地元地区の歴史や生活の教材で同和教育の実践をしたいと願う貝塚市内の小中学の教師たちが、むらの歴

史を調べ、聞き取りを行いました。やがて「東の歴史と生活を掘り起こす会」になり、四年間の活動の成果は、「島村の歴史と生活」という本になりました（一九八三年）。その後、「村めぐり 町づくり」という冊子をつくり、会の活動は中断されました。

◆古文書が二千点、むらの歴史を明らかにする期待

東地区に係る江戸時代の歴史史料（「福原家文書」）が、発見されました。それも二千点あまりというぼう大な数です。これらの資料を読み解いていけば、江戸時代の岸和田藩の支配や、むらの生活の実態が明らかにされることは、まちがいありません。

「福原家文書」の発見がきっかけとなって、昨年一月に「東の歴史と生活を掘り起こす会」の活動が再出発することになりました。新しい掘り起こす会の活動に参加を呼びかけ、ところ、地元支部の人たちをはじめ、小中高の学校先生、部落史に興味を持つ人たち、市外からもさまざまな人たちが約七〇名集まってこられました。

「掘り起こす会」の活動は、古文

書を読み解く歴史班と聞き取り班に分かれて活動が始まりました。

歴史班は月一回のペースで「福原家文書」の目録づくりをおこなってこられた藤本、近藤の両先生にチューターをお願いし、古文書を読み解いています。

聞き取り班は、この一〇年間、小学校の先生たちが聞き取った内容を整理しながら、新たな聞き取り作業を行っています。その成果は、冊子にまとめられ現在第二号を出しました。歴史については、近世史だけでなく、明治以降の近現代史を明らかにしていく班もできました。部落解放に結びつき、研究成果を地元の人にかえし、学校で教材として使える内容の本を作るという会の目的を先頃の総会で確認し、二年目の活動に入っています。

会は、事務局を解放会館の中におき、会員の年会費（三千円）で運営されています。月一回発行される活動通信に活動日の連絡と各班の研究成果などをのせています。

（代表 井上秀和）

図書紹介「被差別部落の民俗伝承 大阪」

墓上の松をめぐって

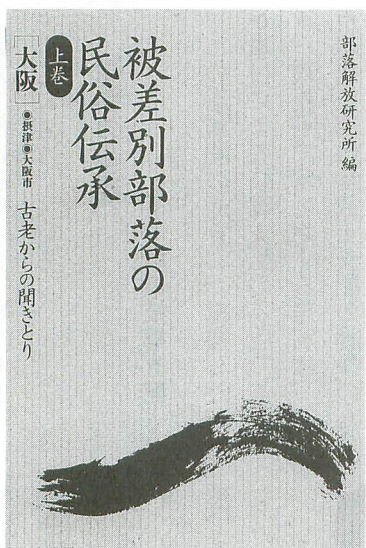
松原右樹（大阪府立伯太高校）

「昔、お墓の上に小さな松の木を植えてな、それがいつぱいになってうっとうしいくらいお墓の中、真っ暗やってん。子どもでもみな同じ。自分の墓地に埋めてな、松の木植える。一人ひとりに松の木植えるからな、ほでたくさんになってまっ暗けになってたわけやな。」（道祖本）とか、「骨を埋めたあと、土盛りして松の苗を一本植えてその上から竹の矢来みたいなん挿していた。」（寝屋川）という墓上の松の風習をムラの古老は語っている。

とはいったい何なのか。かたちだけに拘るならば、それは「枕飯」を連想させるではないか。死者の枕元に供える「枕飯」は、山盛りにした飯の頂に一本の箸をさしたもので、死者の肉体から遊離した靈魂を招き寄せ蘇生させるための憑り代である。「正月きたら何うれし 雪みたいなママ食べて……」などと唄ったムラの厳しい生活を背景にしてみると、この土饅頭の松はいやがうえにも「枕飯」の印象と重なったものと思われる。

土饅頭どまごめうの塚に松を植えるという民俗の底に沈むムラの生活意識や感情

「松」は霊を「待つ」木である。古来より霊の招ぎ代、憑り代として、神仏や祖霊が来臨する聖なる木と見なされてきたことは、能舞台の鏡松をはじめ、各地の影向松・降臨松伝説を見ても明らかなことである。万葉集に「石屋戸に立てる松の木 汝を見れば昔の人を相見ることし」（巻三・三〇九）とあるが、「松」を見ていると昔の人に逢っているような気がする、と



被差別部落の民俗伝承
上巻
大阪 被差別部落の民俗伝承 大阪―古老からの聞きとり
部落解放研究所編
聞きとり― 上下（A5判五四〇頁、三九四頁）

神仏や祖霊が来臨する聖なる木と見なされてきたことは、能舞台の鏡松をはじめ、各地の影向松・降臨松伝説を見ても明らかなことである。万葉集に「石屋戸に立てる松の木 汝を見れば昔の人を相見ることし」（巻三・三〇九）とあるが、「松」を見ていると昔の人に逢っているような気がする、と

詠んだのは、「松」に靈魂が宿るという民俗意識に根ざした発想である。さて、墓上の松の風習は、平安末期制作の絵巻「餓鬼草紙」（河本家本）に生々しく登場する。第四段で、墓原で野晒しにされた死屍を食らいあさっている餓鬼の近くに、いくつかの土饅頭の塚があり、その一つに松が植えられている。墓に木を植えるのは普通のことであり、例えば高野山奥之院に立ち並ぶ樹木の根元には遺骸が埋められていて、今も落雷などで倒れると人骨があらわれるという。木は墓標として植えられたという。

もともと古代では庶民だけの埋葬形態でなかった。万葉集では菟原娘の墓を見て「墓の上に木の枝なびけり」（巻九・一八一）と歌っているし、続日本紀の慶雲三年（七〇六）、養老五年（七二二）の条にも墓に木を植えた記録がある。

遺骨や神（祖霊）を「一柱、二柱……」と数えるのも、この墓に木を植える風習から起きたものであろう。

ムラに残った墓上の松の葬法に、古代びとの信仰と生活感情が生き続けていたわけである。そのことを見つめ直すことを通じて、これからの

葬法のあり方を考える、未来への力が得られるであろう。それが文化というものである。

専任者の紹介

本年四月より、大阪の部落史委員会の専任者として、左記の二名が取り組みを始めています。

青盛 透

横山 芳子

部落解放センター一階の図書室の前に、大阪の部落史委員会の部屋がありますので、御気軽に御立寄りください。

